1969.7.17 明治大学新聞

さながら"不夜城"

徹夜でバリケードの警備

和泉

一号館の壁にはどこの闘争でも見られた如く落書が所せましと書かれている。二、三あげてみると「止めてくれるなオッカサン。恥も外聞もかなぐり捨てて、メット、ゲバ棒に身を固め、明大解体叫びつつ、ホントの大学つくろうと、バリの中から背のびする。紫紺の旗も泣いてるぜ。男明大どこへ行く」といった"傑作（？）調"から「われわれは今、ドス黒い日常性の深淵から身を起こしつつある。一切の既成の学問の拒否という創造活動を通じて…。深淵のコドミにうごめよ。仲間よ、さあ手をつなぎ合い、追いとろう」といった"散文調"。さらには「鉄の顔を持った教授よ。お前らのブルジョア学問が一体今まで何をしてきたのか。われわれはわれわれ自身の手によりわれわれ自身の学問を築き上げるぞ――」といった"絶叫調"まで種々雑多。しかし日大、東大闘争にみられた落書のように必要性にせまられた"心からの落書"は見られず、"冒瀆した落書"が多かったようだ。

平穏にスト態勢が続いていたやさきの六日に起った社学同統一派の突然の"内ゲバ"騒動に、機動隊学内立ち入りの噂も乱れ飛び、戦々恐々としはじめた和泉地区のこのごろ。

スト突入以来、登校する学生の数は少いが、和泉地区にたてこもる全共闘の志気は一向に落ちないようだ。

屋は各クラス・サークルの自主講座が盛んに行なわれ、夜になって毎晩七・八〇人は泊り込む。特に全共闘和泉地区本部のある一号館は、夜になると残ての部屋という部屋に明りがともって、さながら"不夜城"の感を呈している。

しかし、夜だからと言ってバリケードの警備を怠ることはできない。交代で"徹夜張り番"をするのである。正門の警備に当っていたA君は「いつ石塁や官憲のスト破りがあるかわかりませんからね。緊張しますよ…」と語っていた。さすがに眠くなることもあるという。

午前一時過ぎ正門前になじみのラーメン屋が来ると張り番の学生がこれにとびつく。ヘルメット、ゲバ棒を左手にラーメンをフーフー。「この闘争で一番得をしてるのはラーメン屋さんじゃないですか…」とA君は笑っていた。

＝K＝